

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第35号

平成28年10月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

今蘇る、四條畷の合戦に散った南朝悲劇の武将

扇谷、歴史小説「楠正行(まさつら)」を出版

義一筋に生きた、その知られざる生涯を描く

忘れ去られる正行の事績に危機感

9月15日、扇谷昭（四條畷楠正行の会代表）は、楠正行6歳から四條畷の合戦に散る23歳までの生涯を描いた歴史小説「楠正行」を、文芸社から出版した。

四六版・ハードカバー・433頁・定価1700円（税別）で、文芸社の提携全国書店のジュンク堂や紀伊国屋、ヒバリア書店等で一斉販売が始まり、ブックサービス（0120-29-9625）やネット書店でも取り扱っている。

扇谷は、平成22年、四條畷市議会議員引退後、平成24年4月から四條畷市産業振興アドバイザー（非常勤特別職）に就任し、若手職員26名と一緒に庁内横断で立ち上げたプロジェクトチームとともに、四條畷観光可視化戦略を取りまとめた。

同計画を取りまとめるにあたって、その核となったのが、四條畷市の歴史的遺産、四條畷神社であり、神社創設に欠かせない存在であった楠正行である。

扇谷が、何よりも驚いたのは、調べていくうちに、四條畷神社に「誰が祀られているか知らない」そして「正行が読めない」という市民・職員の存在であった。

四條畷市という市名が付いた由来そのものの原点に楠正行がある。そして、四條畷の合戦で散って逝ったその正行を知る人がどんどん減っていく現実を前に、この風化

を何とかして食い止めなければならないと思ったのが、小説執筆の動機である。

史料がほとんど残っていない楠一族、中でも正行のものはほとんど皆無の状態の中で、史実と伝承を下に、できる限りその生涯を忠実に再現しようと、関係施設を訪れ話を聞き、図書館通いで関係文献をあさり、ネットを駆使して古い文献や関係論文を集めて調査を進め、6年の歳月をかけて書き下ろしたものである。

小説は、正行6歳から桜井の駅の11歳までは、主に正行の目で見た父、正成の政治を追ったものであり、11歳



小説「楠正行」を手にする扇谷昭さん

### 楠木正行の生涯を描く

#### 四條畷・扇谷さん 歴史小説を出版

四條畷市に住む元同僚、扇谷昭さん（67）が、楠木正成の嫡男、正行の生涯を描いた歴史小説「楠正行」を出した。正行は二つの朝廷が対立した南北朝時代（1336年〜92年）、父正成の遺志を継いで南朝方として足利幕府と戦い、四條畷の戦いで散った悲劇の武将。扇谷さんは多数の文獻を読み込み、6年かけて原稿用紙約700枚の小説をものにした。

物語は「私」こと主人公・正行が自らの人生を回想する形で進む。武士による執権政治を掲げる足利尊氏・直義兄弟に対し、父正成は天皇を頂点とし、民衆や農民が武士や公家の介入なしに自由に

四條畷市に生まれ、6年かけて原稿用紙約700枚の小説をものにした。正成の死後、正行は味方であるはずの南朝方公家に軽んじられながら、父の夢と南朝復興のため一途に戦う。

扇谷さんは2010年に政治の世界から退き、同市産業振興アドバイザーなどを務めてきた。同市にゆかりの正行の名前を正確に読めない人が増え、正行をまつる四條畷神社もあまり知られていないことに危機感を持ち、2年前から市民参加の勉強会を定期的に行っている。扇谷さんは「目先の損得にとらわれず、自分が正しいと信じる道と義を貫く姿に

ひかれました。現代人、特に政治家に読んでほしい」と話している。

税別1700円。文芸社（03-53369-3060）。【早川方子

▲1 面新聞切抜き

9月28日付毎日新聞朝刊（大阪府下版）に掲載された。

▼2 面新聞切抜き

10月5日付奈良新聞朝刊「歴史万華鏡」面に掲載された。

実までが、整理されて分かりやすく語られている。

正行に関しては資料も乏しく、執筆には困難が伴ったと思われるが、作者は不明の部分想像力で補いつつ魅力的な物語の展開を成し遂げた。

いよいよ死に瀕した時、正行の脳裏に名将の父、正成の背を見て育った生い立ちが走馬灯のように蘇るといのが、本作全体の趣向だ。

ドラマチックな導入部から読者は一気に、歴史物語の世界に引き込まれていくのである。

### 読者からの感想

一人称の語りで物語が進んでいくことで、登場人物やその身分と立場、山岳・平野・河川等の地理地形の解説、鎌倉幕府衰退期から始まる時代背景の推移など、ややもすると複雑で読解が難しくなりそうな記述が、非常にスムーズに読み手に伝わっていると思います。

一人称の語り部としての着想に感服しました。

幼少期、龍覚坊に預けられ文武を教わりながらも、父、正成の生き様を見、「見えざる敵との戦いこそ真の

戦い」「義、すなわち正しいことのため、道理を重んじて事を決し、決してそこに躊躇やためらいがあってはならない」など、大変重みのある教えを直接受けることで交流し、幼い正行が父譲りの義の精神を育んでいく様子が、行間から滲み出すように伝わってきました。

子はやはり身近にいる大人から生きる規範を得ると思いますし、そうした連綿と受け継がれる精神性の系譜を、見事に描かれていると思いました。

この楠正行を読み、一番考えさせられたことは、果たして自分は自分の人生を精一杯生きているだろうかという点でした。年を重ねるにつれて無意識に避けるようになっていた自らへの問いかけを、この「楠正行」は思い出させてくれました。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)

10/15 斎藤

# 義に生きてた真の姿描く

「歌書よりも軍書に悲し吉野山」と詠まれたように、南北朝時代においては南朝方の哀史がすく思ひ浮かぶ。その中でも特に、悲劇の武将・楠正成とその子・正行(まさつら)の、桜井の駅(大阪府島本町)における



扇谷 昭さん

別れのシーンは、唱歌「桜井の訣別(わかれ)」などで、高齢者の世代にはよく知られている。

だが、父の遺訓を守り、正行が精進し、北朝軍に対峙する勢力を築き上げ、その13年後に吉野山・如意輪堂の板扉に「かゝ

## 歴史小説「楠正行」 四條畷の扇谷さん



扇谷さんは4歳から大阪府四條畷市で育ち、市議会議員を3期務めた。その後、同市の産業振興アドバイザーとして、隠れた歴史遺産を観光振興につなげ

らじと……と弓矢の鏃(やじり)で「覚悟」を書き残して、四條畷の戦いで散るまで、その間にどのような暮らしを送ったのかについては、あまり知られていない。

吉野に生まれた扇谷昭さん(67)が、自身の研究成果に基づき歴史小説「楠正行」を出版した。

「四條畷楠正行の会」を主宰し、史料が非常に少ない中、正行の真の姿に迫るべく、足かけ6年の歳月をかけて史料の発掘に奔走。地道な研究成果を小説の形でまとめた。

物語は正行が四條畷の戦いに敗れ、弟・正時と共に自刃する場面から始まる。第一章「父、

正成立つ」から第十五章「四條畷の合戦」までは正行が自身の人生を回想する形で進行。最終章「その後の正行」では、扇谷さん自身が畿内や薩摩の旧跡を案内した。徳川光圀による「忠臣」顕彰は、幕末の志士たちの精神に影響を与えたという。

武家の世に移行しているにもかかわらず、現実を見つめず、過去の栄華を追いつめる公家たちの愚かさが描かれる。それだけに、「義」のために一途に生き、散り際までもが潔い、楠一族の生きざまが、ひとときわ光を放つ。扇谷さんは歴史に名を残した正行らの事蹟が忘れ去られようとしている現実に危機感を覚えたといひ、「埋もれている四條畷周辺の貴重な歴史遺産を再生・活用して、観光振興につなげたい」と話す。

四六版、433頁、1700円(税別)、文芸社刊。問い合わせは同社、電話03(53369)1960。

以降は、父の遺訓を受けた正行自身の目線で、正統な南北朝復権ただ一筋に生きてきた生き様を描いた。

### 文芸社編集氏講評

父・正成の遺志を継いだ楠正行終焉の地、四條畷在住の作者が、六年がかりの研究の成果を投じた本作は、正行に新たにスポットライトを当て、その真の姿に迫ろうとする意欲作といえる。

序章と最終章を合わせると全部で十七の章からなる本作は、四條畷の戦いに敗れた正行が、弟、正時とともに、いましも自刃しようとしている場面から始まる。

すでに四條畷で命を絶った正行が、自らの人生を振り返る形式であるため、子どもの彼が知る由もなかった事